

## プラキニロギア

——アリストンにおける柏拉图のアリストーのあり方にについて——

平野陽一

〈ピロニアトー〉(πιλονιατος) といふ知的營養に対し、理論・觀

照) (θεωρητος) 的な探求のあり方を明確に意識し、自らの学の中心に据えた最初の哲学者としてアリストンの名を挙げるにしたがたる者にはおもくしないだらう。事実、ソクラテス刑死後(399. B.

C.) のアリストンの最大の課題は、當時においてもまだ目新しかったいの用語についての旧来の通念や思潮を超克しつゝ、それを確固不動な「哲学」として人間の営みのなかに位置づけることであつた。その彼が、日常の生活に有用な実践的知恵として健全な判断) (δικαιοσ) を標榜する弁論・修辞家イソクラテスと彼の学派に対して激しく抵抗し、あくまでも「厳密な知識」(επιστημη) の獲得

をこの〈ピロニアトー〉の絶対的目的に掲げて、たゞとはよく知られてゐる。そして〈ピロニアトー〉の概念をめぐるいのようなインクラテス派との確執のなかで、彼がこの用語の取り扱いについて常に慎重な姿勢を崩さなかつことは、彼の晩年、意に反してイソクラテス流のピロニアトー理解が一般化するに至ると、用語の誤解・誤用を恐れて当時執筆中であった『法律』においてその使用を意図的に極力控えた、という事実にも窺い知ることができる。

昔の人たちの行つた「哲学」(φιλοσοφια) なりのよくなあり方、すなわちペルタ風の一種の〈短い論説〉(βραχυλογια) であった。(343 b 4-5)

と評言してある。アリストンが経験知・実践的色彩の濃じこれらの箴言に関連づけて、厳密知、理論知を旨とするアカデメイア流の愛知の営み以外には許すことのなかつたピロニアトーの名称を唯一例外的に与えているこの箇所は、七賢人の知のあり方に——(最初の哲学者)とされるイオニア自然学の祖タレスは別として——これまで哲学知の性格をいたせなかつたが、彼らを哲学史の域外に置いてきた私たちを少なかつず当惑せしむる

だね。

しかし、初期対話篇のひとつである『ハロターハベ』342 e-343 b では、前述のアリストンとは少し異なつた姿を呈する。これがやあら。ソクラテスは彼はいわゆる「七賢人」(επτα σοφοις) の名前を列挙し、彼らが、「汝自身を知れ」や「度を過けずなけれ」というような箴言をデルポイのアポロン神殿に奉納したとして、

と評言してある。アリストンが経験知・実践的色彩の濃じこれらの箴言に関連づけて、厳密知、理論知を旨とするアカデメイア流の愛知の営み以外には許すことのなかつたピロニアトーの名称を唯一例外的に与えているこの箇所は、七賢人の知のあり方に——(最初の哲学者)とされるイオニア自然学の祖タレスは別として——これまで哲学知の性格をいたせなかつたが、彼らを哲学史の域外に置いてきた私たちを少なかつず当惑せしむる

だらう。先に省みたようなく「ピロソピア」の慎重な取り扱いを思ひ起こすならば、私たちは彼らの「ピロソピア」と「プラトン」のそれとの間に何らかの連関を想定せざるはいられなくなるからである。

「アラキヨロギア」とは何か、そして「プラトンはなぜこれだけロソピア」の名称を与えることを許したのか、私たちはこれら問題に検討を加えながら、「プラトン」とその周辺の時代のピロソピアのあり方について、いまいじど振り返ってみたい。

### I プラキヨロギアの基本的性格と哲学的問答法

『アロタゴラス』に登場する知者・賢人(1)たゞ——「レトスのタレス、ミュティレネのピッタロス、プリエネのピアス、アテナイのソロン、リンドスのクレオブーロス、ケナイのミヨソン、スペルタのキロノ——の原著作の大部が散逸して、る今日、彼らの知的動向を最もよく伝える間接的証言として、後三世紀の学説誌家ディオゲネス・ラエルティオスのいわゆる『哲学者列伝』をあげることができる。しかしそこで紹介されている数々の逸話を通じて読み取ることのできる共通した「七賢人」像は、僭主や立法者などの実際政治家として活躍しながら同時に詩人としての才を示し、また主として政治・社会・倫理の分野にまたがる個々の特殊な技術知、生活に有用な実践知(2)を身につけ博学多識の人、すなわち知者(3)にすぎない。私たちもまたこの点を考慮して、これまで彼の普通的・原理的な知の獲得を目指す

〈愛知者・哲学者〉(philosophos)の列から排除してきた。けれども『アロタゴラス』に見る限り、彼らに対する「プラトン」の觀点は私たちとは違うようである。彼は詩作や立法など個々の専門的な技術や箴言の倫理的内容そのもの——例えば「不知の知」の問題に關わるような——を指して「ピロソピア」と言つてゐるのではなく。彼の関心が七賢人が口にする言葉の知的內容にではなく、その短さに向けられて、る」とは、先の引用の直前に「スペルタ人が哲学と言論にかけて最高の教育を受け」おり、このようないくばんに機會がくるべく、

彼はあたかも投槍の達人のように、突如はいふやうな短く圧縮された言葉を投じる(*ενέβαλεν πήμα ἀξιον λόγου βραχὺ* καὶ συνεπραπείσθην) のであり、そのため対話の相手方は、子供と何の異なるといひのないような觀を呈するにいたるのだ。(342e 1-4)

と語られて、いることでも明らかである。そして「プラトン」の言及する「アラキヨロギア」が、短い言葉で問題とされる事柄の核心を鋭く突く発言のしかたを意味して、ると思えることができるのは、「」のよう短言(*τοῦτο πήμα*)が完全な教育を受けた人間にして初めて可能」(342e 7-343a 1) であり、さらに彼らの知恵が「それぞれによつて語られた簡潔な、肝に銘じるよくな短言(*ρήματα βροχέα διεπορημένα*) である」(343a 7-8) と指摘され、冒頭の引用が以上に要約した部分の結論として導かれて、るといふからも了解されるだろう。

じいりで、〈箴言〉という形式を引合いでして出されたプラキュロギアが、また〈議論〉において示されるという事態は、プラキュロギアが基本的に二重の性格を持つていて、それを窺わせる。箴言は短い言葉に凝縮された神的な知として、神託や予言などにみられる神の言伝の形態を模したものであり、いわば「上から下へ」の一方的な語りかけをその基本的な性格として備えているが、こうした箴言のあり方は「一対一」の対話を基調とする議論のあり方とはどうしても一致しないよう思えるからである。

前一世紀の歴史家ディオドロス・シクルスによる次の報告は、七賢人の時代のプラキュロギアの様子をありのままに伝える数少ない証言として、またこの問題の解決の手がかりを私たちに与えてくれるものとして貴重である。

当時、教育を受けた者たちの間ではプラキュロギアが追求されてきたのであり、クロイソスは……賢人たちの間で最年長であつたアナカルシスにこう尋ねた。

「そなたは生き物のなかで何が最も勇敢な動物だと思うか？」

彼は答えた。

「最も憤怒な動物です。彼らのみが自由のために喜んで死ぬからです」 1 X . 26

自分の名をあげて喜ばせてくれるものと信じていたクロイソスは、予想外のこの返事に不満をもち、「最も正しい動物は何か」など次々と質問を替えてみるが無駄であったという。

問う者と答える者に分かれてのやりとりは、たしかにプラキ

ュロギアが会話においても展開される余地があることを示している。けれどもこれがプラトンのいう〈議論〉——ソクラテス的対話——にそのまま相当するものとはいえないだろう。質問者の問い合わせれば「何であるのか」(τι είναι)を問い、「まさにこれこれであるといふのめの」(δε λέγω)の答えを要求しているわけではないからである。前提と帰結を対話者間で相互に確認しながら、論証の過程を辿ることによって「何であるか」の答え、すなはち問われる事柄の〈本質〉を追求する嘗みを〈対話〉とするならば、七賢人のプラキュロギアは、問われた者がすでに獲得している知を短い言葉にまとめて答え、問い合わせた者はそれをひとつつの謎として解釈するような一種の謎掛け問答の形式を示しており、この点では、予言や神託と同一の枠内に位置づけられる箴言に、その表現の場を持つていたと考えられるのである。

一方、プラトンが自己流のプラキュロギアを具体的に演じてみせるのは『ガルギアス』448d-449dである。前五世紀の名高いソフィストでありイソクラテスの師でもある弁論・修辞家の名を冠されたこの対話篇は、ゴルギアスとはいつた何者であるのか、ところどころにひいて得た解答を得られなかつたソクラテスが、対話相手ボロスに皮肉を込めて次のように再び問い合わせる場面から始まる。

誰もゴルギアスの持つている技術がどのような性質のもので

あるのかを尋ねてはいないのだよ。そうではなくその技術は何であるか、そしてゴルギアスを何と呼んだらいいのか、ということを尋ねているのだ。さあほどカイレボンが、君のために例をあげて質問していたときには、君は彼に対しても適切に、しかも短い言葉で(*αὐτὰ βούλευσιν*) 答えていたのだが、ちょうどあのとおり今も、その技術はあるか、そしてわれわれはゴルギアスを何と呼んだらいいのか、それを言ってみてくれ。448d6-449a2

美辞麗句を連ねることに終始したボロスを対話の相手には不適当とみて、ソクラテスはこの後、直接ゴルギアスを相手にこの問い合わせを試みようとするが、その際の「長い話し方」(=演説) (*μαρτυρία*)の方はまた次の機会にやつてもらうことにして、今回は「短い話し方」をやつてくれ」と一問一答式の問答を要求する彼の言葉は、「弁論術—マクロロギア」対へ問答法—「ラキヨロギア」の図式において、プラキヨロギアが「何であるか」を厳密に回答する態度に立つ「対話」として理解されていたことを示している。ところで、すでに周知のことであるが、ソクラテスによれば、弁論術は「言論による魂の一種の誘導」 (*phadr.* 261a) であり、聴衆の耳に心地よい美辞麗句を一定のペターンで聽かせて、彼らの魂にへ心地よし・快樂」を与える (*Grg.* 462c)、一種の催眠状態に陥れて説得する、「技術」ならぬ「経験」の類のものとされている (*ibid.* 463b)。したがって、弁論術を批判するプラトンがプラキヨロギアに期待したもののが、それの「突如は」とするような

「肝に銘じるような」言葉の鋭さであったことは、容易に想像ができるよう。プラキヨロギアはまた、鋭利な刃物にも似て、対話相手の情念に心理的な衝動として驚き・恐れ)を与える、探求者としての魂を逆に覚醒させ、そこから新たな意識を引き出し、対話者を次なる対決の途へと向かわせるのである。

哲学の方法論として純化、先鋭化された「対話」、すなわち「哲学的問答法」は、対話者間で同意された「仮説」をひとまず設定し、それを起点として論理的順序を踏まえながら「真実在」へと論証の過程を繰る一問一答式の問答であり、それを実践するためには、まず、対話者相互の的確な問答による吟味・反駁の共同作業を必然としている。プラトンのプラキヨロギアはまさにこの必然性の上に立脚し、一方では鋭い語り口で論争相手の情念に切り込む論駁法として、他方では真実在・存在の問い合わせに端的に答える態度として、哲学的問答法の構造の全体を踏まえて成立している。そしてこの二方向の企図は、私たちがこれまでみてきたように、前者が「昔の人」の箴言、予言、神託のあり方に、後者が「プラトン自身」の対話のあり方にその根源的な由来を持っていたのである。

## II 「カイロス」を捉えること・語ること

前章で私たちは、プラキヨロギアがプラトンによって哲学的問答法に言論の一技法として取り込まれていてことを確認したが、次に「短く語ること」の本来的な意味をプラトン前後の主として

文学を中心を探つて、あだい。特定の言論法を指す述語「**プラキュロギア**」は比較的新しく、前四世紀のアラトーンやインクランテス以前にはその用例がほとんどみられないが、『アロタゴラス』での特徴として語られた、「弓や槍の達人のように短い言葉を投じて事態の「的」を見事に射抜き瞬間に相手の心を捉える」という表現は、叙事詩や悲劇の間でもしばしば目にすることができるからである。

例えば、前五世紀の悲劇作家アイスキュロスの『トガメムノーン』では、トロイア陥落後のメネラオスの遭難をコロスの長が要約して推測してみせたとき、遭難を伝えに来た伝令はその予測が的中したことを次のように驚いてい。

見事、弓矢の名手のいくて的を射当てられた。

そして大きな災難を手短かに語られましたな。(628-9)

そして、この「的(*κατόνος*)を射当てる」と同様の表現が、ヘカイロス(*καιρός*)を用いても可能である」とを次のソボクレスの用例にみる」とがである。

王よ、この方が何か「的を得たこと」(*κατέριν*)を話しておられるな、それを学ぶがよろしからう。あなたの方でも父上のことわ、お二人とも、もうとめないとお言いですから。(Aen. 724-5)

本質的に、ある事態、存在、行為、状態を凝縮して表徵しうるような極頂的一点——質的瞬間<sup>(9)</sup>——を指すべカイロスは、とくに人間の行為に付随する瞬間として、ある行為を為すのに善いと

き、為すがくともを意味し、しばしば「好機」(好機)と訳され、まさに現在の瞬間(いま)として感得される。したがって、それの形容詞形「カイリオン」(*κατίφερος*)や、あるいはその抽象名詞形ヘタ・カイリア」(*τὰ κατίφερα*)は、「詰らに宜しき」と「的を得たこと」、そして端的に話の「要点」、事態の「核心」ほどの意味を、空間的瞬間と時間的瞬間の両面において担つていてよいだろう。そして、カイロスを捉えてそれを短い言葉にして語るという表現が『アロタゴラス』の用例にみたプラキュロギアの具体的内実と一致するいへば、やがて次のソボクレスの『コロノスのオイディップス』(806-6) ドオイディップスとクレオンの間で交わされる

る

「なんとお前は、舌が恐ろしく回る奴なのだ。どんなどに  
も巧みに語る者だ、正しい男を私は見たことがない」

「多聞(*τὰ πολλά*)と要点(*τὰ κατίφερα*)を語る」とは別物だ」  
「おるでお前は短い言葉(*βαρύτα*)か、語るぐあとも宜しく  
(*εὖ κατίφερος*)語つてよるようだな」

ところが余話表現に認めることができる。またエウリピデスの『トウリスのイピゲネイー』(827-30)で、何者であるかを問われたクリュタイメーストラーが「私はレーダーの娘、名はクリュタイメーストラー、アガメムノーン王は私の夫」と答え、「あなたは要点(*τὰ κατίφερα*)を短く(*εὖ βροχεῖ*)見事にお話しなった」とアキレウスの賛辞を得ている余話も同様に、プラキュロギアの実践例と考えてよいだろう。

「されども私たちば、『カイロスを語るいへ』を念誦表現における修辞法や語法に限つて説明するわけにはじかね。」トウリゴットの悲劇『ヘニキアの女たち』では、真理に備わる本質的な簡潔性がヘカイロスを用いて次のように説明されているからである。

「真実の話はもともと簡単なものだ。」

「正しい」とには長々とした説明など要しない。

なぜならそれは、自らにカイロスをもつつかんだ。

だが、不正確な言葉はそれ自身病んでいて、〈知〉という薬が必要なのだ。(469-72)

真理を含む言葉は常に短いものである。本性的に「隠れたい」とを好む(12)〈真理〉は、「短く語る」こと、すなわち言葉の冗長な部分を極限まで削ることによって、幾重にも身に纏った覆いを剥が取られ、その非隠蔽性(トーネティア)をあらわに示すことになる。したがって、神的な言葉、神託や箴言の真理の認識は、これまでのロゴスのカイロスを捉え、その隠された神意を探るいふによつてはじめて可能となるのである。

神託を司る予言の神アポローンを「沈黙しているか、〈語るべし〉のみ語るのを好む」(Sept. 619)と評して、この神の語り口に似せて、カドモスの國王ホーネクレースに「國家の舵取の座にあつて舵を取り、その田だ畠へ田を閉じる」となく事態を見張るものは誰しも、〈事の核心〉を語らねばならぬ」(Sept. 1-3)と訓わしめた悲劇作家アイベキロス、「多くの物語の分量を短くまとめてく詩の華のみ語るならば、聴衆の非難を受ける」とが少な

」(p. 1.81-2)と歌い、詩歌女神の寵を請う叙情詩人ビンダ

ロス、おひだ「我が時代より祈りを叶ふよ」(341)いやくべに懇願する没落貴族テオグニスなど、これらの作品にみられるカイロスの関心、人知と神意の関わりは、詩と哲学がまだ未分化であったソクラテス以前の時代から、「トラキヨロギア=カイロス語り」が、統治者、予言者、詩人などを神的な知者に据えるギリシアの伝統的な知性観の基礎を成していくことを端的に語つてゐる。そしてこの知的伝統のなかでは、あらゆる事物のカイロスを捉えて簡潔なロゴスに還元するいふことを内実にするアラキュロギアは、言論の一技法である以前に、ロゴスを通じて真理が開示される瞬間的な時・場(=カイロス)への近接の努力を背景として、〈愛智の嘗み〉の本来的な意味を担つていたといえるだらう。

「カイロス語り」によつて接近する〈ラキヨロギア〉と〈カイロス〉の密接な関係は、私たちが七賢人を形容する際に「*πεπτότερος*」の意味について再考するに至り、普通に用いる〈博学〉(τελευπαθητή)の意味について再考するに至り、あらゆる鮮明に浮かび上がるに至る。デモクリトス派(Demokritos)の一人であるアブドゥラのアナクサルロスは、『統治者編』(Hegel, *Baruches*)と題された断片のなかで〈博学〉について次のふうに述べてゐる。

博学は大いに役立つものであるが、他方でそれを身につけた者は大いに害をなす。すなわち、それを扱うことによつて長けた者には役に立つ反面、誰に対しても軽率に言葉を重ねる者に

は書をなすのだ。だからカイロスの限度 (*καρούς μέτρα*) を知らなければならぬ。なぜならこれが知恵の境目だからだ。

カイロスを心得ずには (εγγόν καιρού) 言葉を吐く者は、たとえ知ることを喋つたとしても、知恵でそれを判断しているわけではないので、愚か者の誘りを受けることになる。(D.K.)

72B1)

「ラクレイオスが」「ピロソボス（愛知者）はじつに多くの物事についての探求者でなければならぬ」(Fr.35) と語り、愛知者の条件として博学の修得を挙げながら、その一方で「博学は、眞知を教える」(Fr.40) と批判したのも、このアナクサルコスの見解と同様に、博学の利害両面性を指摘しながら、それの広範囲に及ぶ知が披瀝されるさいに、ともすれば陥る多言・長広舌の弊害を訴えているためだとみてよい。<sup>(13)</sup> 思慮なく多言を連ねることは、先にもみたように、本来あらわに開示されるべき真理をさらに覆い隠してしまうことに他ならないからである。このよううに博学者は、「知ある事柄」を把持する「知者」であると同時に、それを「知恵で判断し」(*τηρεῖν εἰν οὐδέποτε πρωτεύειν*) て、カイロスを捉えた短い言葉で語る者であることによって、また「愛知者」を称することが許されるのである。

一方、ラクレイオスにおける「ピロソボス」の用例と並んでプラトン以前の数少ない「ペリソピアーノ」類縁語の使用例のひとつ<sup>(14)</sup>、ヘロドトスの「ペリソペイン」(*perisopoeia*) をあげることができる。

クロイソスは次の言葉でソロンを迎えている

そなたの賢者であることはもとより、知を愛し求めながら、  
(φιλοσοφῶν) 多くの地を見て巡り歩いてきたことも聞き及ん

でおな (1.30)

そして、この言葉の後で「最も幸福な者は誰か」をめぐる両者の問答は、先に取り上げたディオドロス・シクルスの伝えたアнакルシスとの「ラキヨロギア」に酷似している。ソロンは人生の結末を見ずして幸福を論することはできない、としてクロイソスを幸福な者のうちに数えることを断わった(1.35)が、後にリュディアがペルシアに滅ぼされ、その身が火刑に処せられるに至つて、はじめてクロイソスは幸福とは何かを悟つたという(1.86)。ソロンの「人間は生きている限り、誰も幸福ではない」という言葉に隠れ潜む真実——幸福の本質とクロイソスの運命——を、この言葉が一種の予言としてリュディアの滅亡というかたちで実現するそのへど<sup>(15)</sup>まで、クロイソスは捉えることができなかつたのである。

短い言葉でカイロスを暗示したソロンと、ついでこのカイロスを捉えることのできなかつたクロイソス、この両者の対比を通じて、私たちは七賢人の「ペリソペイン」（知を愛し求める）の根底に流れる「ラキヨロギア」の精神を鮮明に感じとることができるだらう。

### III 「驚き」と哲学

「昔の人の」ペリソピアーノのあり方としてプラトンに認知され

たプラキュロギアが、プラテン自身の理論・観照の学としての「ピロニア」におけるそのよんだ位置づけを与えたのか、第一章でも哲学的問答法との関連で簡単に触れたこの問題について、本章ではもう少し詳しく見届けておきたい。「カイロスを捉えて語る」というギリシアの知的伝統を背景としたプラキュロギアが、この知的伝統からアラトンが脱却することによって、その性格を変えたことは充分予想される」とだからである。

實際、プラトンのカイロスに対する関心はかなり希薄である。彼の対話篇及び書簡におけるカイロスの使用は計四十九例であり、けして少ないとはいえないが、この大部分は〈適切に〉(πρὸς τοὺς αὐτούς)、〈やうどよい時に〉(εἰς κακοφ, κακοῦ καλόν)などの慣用句的表現で占められ、明かに事態の核心としてのカイロスを示す用例としては僅かに一例——言葉の〈意迷〉(Πλ. 307b1)、話題の〈核心〉(Lg. 772e6)——があるにすぎない。またカイリオント・カイリアに至りては計三例のいやれにゆきの種の意味はみられないである。

カイロスに対するプラテンのよんだ無関心の原因は、次のイソクラテスの言葉によつて説明することができる。

知識するいふ(τηρεῖσθαι)によつてはカイロスを捉えることはできない。なぜなら、すべての事柄においてカイロスは知識の網をすり抜いて(διαφεύγει τὸς ἀνατρέψας) からだ。

(Antidosis 183-4)

カイロスは「知識するいふ」、すなわち觀察をもとに推理、推論

を積み重ねてひとつの結論を田指すような蓄みによつて獲得されるではなく、その場その場で事態を瞬間に察知することによつて直観的に感得されるというのである。このことは、前章でみた予言者や詩人の〈知〉が、神秘的直観や詩的靈感に触発されることを考えれば了解されるだろう。

したがつて、道徳的、実践的な価値の規範をも厳密な知識として把握しようとするプラトンが、〈好運・偶然〉(τύχη)によつてそれを獲得が左右されるような知のあり方を峻拒し、自身の「ピロニア」から排除しようとしたのは当然である。そして、理論・観照的な探求に耐えないと実践のカイロスを哲学知の対象の枠から外し、究極の原因者としてのイデア的真实在を代わりに据える——実践〈πρᾶξις〉からの觀照〈θεωρία〉への転向——は、哲學のあり方の見直しにおいて、「カイロスを捉えて語る」という営みを通じて本来的にピロニアピトードであったプラキュロギアは、その任を解かれ、ただ「短く鋭く語る」ことを特徴とする言論の一技法として哲学的問答法に据えられることになるのである。

しかし、理性の直観の働きによらなければカイロスが捉えられないといすれば、プラキュロギアは、対話者の直観を喚起してそれを捉えねば、語らせてはいることになる。「肝に銘じるよくな」「はつとするよくな」驚きも、カイロスを直知するときには突如として目覚めさせられた新鮮な意識だと見えるだろう。そして先にもみたように、この〈驚き〉は、対話者間の吟味・反駁をめぐらに次なる対決の場へと一步づつ進めるように導くものであった。「驚

ヘリヒ(Heuristik)が愛知者の情念であり、愛知の歴史の起源はそれ以外にない。(Th. 155 d) も、「神がいよいよかの聞いて、されば、実は哲学が話してくる」といふ。……その哲学が詰つてゐる所、君はいま驚いてる(Heuristik)のだ」(Gr. 481d-482c) ハハタチスが詰る所へは、哲学の始動因としての〈驚き〉と、驚きの始源としての〈哲学〉は、プラキュロギアより、絶えず相互に更新・再生されながら、思想的當為全体としての「突如として、本性驚嘆すぐある美を感得せよ」(Smp. 210e-211a) が、真実在へと論理の過程を遡上するのである。

されども、この論理の起始には、知識する所にては捉えられず、したがつて理論的説明を与える所ではあるが、カイロス、すなわち事態の核心、うべきもののが、理論的展開の全体的な先取りの所とその重要性を感じねでらうといふ(仮設)として据えられていかなければならぬ。そして、このようないまだ知られない理論的説明の出発点を、対話者の眼の意識から引き出すといふのも、直觀を喚起するプラキュロギアの作用といえるだらう。すなわち、詩人、例えばピンドラオスが神話のあらゆる内容を長々と叙述するのではなく、「多くの物語のカイロスを射抜く」とその瞬間、詩的靈感に射たれた聴衆は、神話のいまだ語られぬ部分を、電光に照らし出されたかのように鮮やかに感知するといわれるようだ。プラトンにおいてもプラキュロギアは、対話のなかで、いわば詩的・予言知的靈感をロゴスの指導下において疑似体験をめぐらす。対話者に内在して、いふ思へくを引出し、それをひとまずへ假

設・前提へして設定する契機を与えてくるのである。

しかし、このもへな真実在への近接の見取図のなかに確固とした位置を得たかにみえるプラキュロギアも、それによって触発され、理論・推論的考察の出発点に置かれるものが、それ自体論証を経ぬことなく直知によつて獲得された〈前提〉でしかないと、意味では、厳密知を求める哲学のあり方として依然として不安定、不完全である。カイロスが「知識の網をすり抜ける」のである以上、強いてそれを捉えようとすれば、論理ば、たとえ正しくはあらじゆ「やゝかじ夢から呼び覚まされたばかりの状態にある」(Men. 85c) 〈既ねへ〉の束縛から逃れることができないだらう。すなわちプラキュロギアは、現実には「原因(根拠)の思考によつて繋り立つ」(ibid. 98a) ところによつて浮動的な〈思へく〉を〈知識〉とし、それにそれを永続的なものと固定化する。いわゆる学知の〈想起〉の補完を待たねばならないのである。

### おわりに

私はこれはまで、多方面に及ぶ「知」の眞の意味、核心を捉えてそれを簡潔なロゴスに還元する七賢人のプラキュロギアのあり方が、たとえ哲学知のあり方としては未熟であつたにしても、プラトン哲學の方法論に少なからぬ影響を与えてゐることを確認してきた。プラキュロギアは、学知の想起説が哲学的當為の全体に周到に準備された上で、改めて哲学的問答法の一部として据えられてゐるのである。したがつて、プラトンがプラキュロギアに与

べたく「ヨーロッパー」の名称も、「昔の人の」という言葉と共に使われ、この七賢人の知のあり方に対する「然然」の評価だったと言えるだね。そしてこの確認は、七賢人をはじめとする知者たちの「ヨーロッパー」を再考することを私たちに迫ることになる。これが私たるがみで始めたよろだ、彼らの知のあり方を、すでに由明のいふとして簡単に実践知の一端や片付けられるといつぱりやないようと思われるからである。

## 注

- (1) ただし、非常な博識家としてトマス・アカルニイ（fr. 129）やサンペテルブルク（fr. 129）とも登場するヨーロッパーが、プラトン以前に、理論・観照の学としてのヨーロッパーを創始したという後代の証言が、ティオダネス・ラハルティオ（1.22）やキケロ（*Tusci. 5.8-10*）にみられる。廣川洋一「トマスの知識的環境——〈ヨーロッパー〉とハイデルバーグの11つの論難をめぐって」『東海大学文学部紀要』第四八輯 1987 p.4
- (2) 廣川洋一『イシク・クラウスの修辞学校——西洋的教養の源泉——』岩波書店 一九八四年、一五一页—一七七頁 廣川、前掲論文
- (3) 七賢人の成員については諸説が伝えられ、必ずしも七人と限定されているわけではない。ティオダネス・ラハルティオは『哲学者列伝』の第一巻第一章で、プラトンが紹介した七人に加えて、マリアンドロス、アナカルシス、エピメニデス、ペレキヨーネスの計十一人を七賢人として取り

- (4) アテナイの立法者フロンに限り、計118〇余行のサンクア詩が断片の形で現存し、当時の「知者」の学的関心が人間・社会の分野から、自然・宇宙論の領域にまで広く及んでいたことをこれらの断片は伝えている。  
(5) 「汝自身を知れ」の箴言は、その応答として「知つてはいいが、知らぬふんとを自ら知つては」こと、すなわち「無知の知」の命題に姿を変えてプラトンの数々の対話篇の主題に据えられる。
- (6) これ以外の用例としては、ティオダネス・ラハルティオがキロンを「短言をなす者」（*βρεφυτωτος*）と評した例があり、トマキヨロギアを「キロノ風」（*κιρονικό*）と称している（I. 3.72）。せたゞ、イオムロブ・シクルスも彼について、「キロンの言葉は短いたがひゅ（*κύρος βρεφυτός ἐστιν*）最高の生活を営むために必要なすべての忠告を含んでいた。なぜなら彼の箴言は、デルポイに運びられたどの供物よりも価値があるからだ。」（9.10.6）と記載してある。
- (7) 『アロタガラブ』334c-338e やせんクリトスばトロタララクを相手にトマキヨロギアを要求してはいる。
- (8) 言論の一技法を指す語彙としてのトマキヨロギアは明確にアリストン、イソク・クラウス時代に誕生したとみられる。『ハイドロバ』（269a et 272a）では「簡潔話法」としてその他の話法の端末に登場する。
- (9) Paula Philippson, 廣川・川本編『ギリシア神話の研究』東海大学出版部 1974, pp.121-2 原注(2)
- (10) Van Groningen, 瞽口祐子他訳『過去からの発想』未

来社' 1988 年' 179-80 頁' 紙(3)

- (11) John. R. Wilson, "KAIROS as "Due Measure"" ,  
GLOTTA 58 (1980) 177-204pp. ~ William H. Race,  
The Word *καρπός* in Greek Drama" *TAPhA* 111  
(1981) 197-213pp. ドゼ、從來のカイロスの概念解釈が時  
間的側面に強調され過剰化されてきたこと、カイロスと非時間  
的な適正概念を積極的に認めようとしているが、Philipp-  
son が「持続なき瞬間ににおける存在の充足」と正しく指摘  
したことから、カイロスは本來的だ、時間的瞬間と非時  
間的・質的瞬間の両面において同時に行為者に感知されるた  
るものなのである。

(12) 「本性は闇ねりいふを好む」 *トトク・ハイメス* (fr. 123)

(13) 西川亮「トトク・ハイメスのアナクサンロバ—— Demokrite  
考 (やの1)」『広島大学文学部紀要』一九七四年、第1111  
巻、28-46pp.

- (14) ハタハタバの流れをくおヨロホ木バの「短時を手がけ  
ばらじやるわんばな」カトトバの堅度を知らばせたひだ  
こ」 と語りだす點もねえ。 Athenaeus Mechanicus.  
ed. Wescher. p. 4.D. K. 44B23

(15) ハタハタバ以前のくヨロホ木トバ類縁語の用例だ、本論  
で取り上げたトトク・ハイメス (fr. 35)、トトク・ハイメス (1.  
30) の他と、レオナルド・クラウス『古医術论』 (VM 20)  
ヒヨウス・ヨロホ木トバの使用的証明例が載るのみ  
である。

- (16) Leonard Brandwood, A Word Index to Plato,  
Leeds, 1976  
(17) 「みだらば、虚偽を説く事よりいたへ、多くの物語のく  
カトトバ。

イユベの射抜いた」 Pindaros (N. 1.18)

- (18) 廣川前掲訳書、1111頁、原註(14)

(19) 知識の網をすり抜けることのできるカイロスにて、目的を得  
た「健全な判断」を把握している人 (*Panathenaicus* 30)  
ギアを駆使するのが弁論・修辞家のくヨロホ木トバのあり  
方である。〈教養人〉とは、

日々に出合った物事を見事に処理し、多くの場合に有益  
な示唆を得ることのできるカイロスにて、目的を得  
た「健全な判断」を把握している人 (*Panathenaicus* 30)  
トトク・ハイメスの言葉にも明かにだねば、「知識の  
網をすり抜けた」カイロスを捕り逃がしために、投網で獲  
物を一網打尽にするよろ、あいかじめ多くの言葉を、そ  
れも「真実」そのものではなく「真実のしじ」とを投じ  
て、「空への場合」それと触れ、カイロスにて、この「思  
わく」 (=健全な判断) を得るなどができればそれで良し、  
とするのがカイロスに対する弁論・修辞家の基本的態度で  
あつた。追記 本稿におけるプラトンの引用は、岩波書店版『トト  
ク・ハイメス全集』に拠り、一部を内容に合わせて改変して  
使用させていただいた。